

# 柳原三佳の 新 一瞬の真実

警視庁白バイ隊員から  
高校生2年生への  
熱いメッセージ

FILE NO.037

番外編

●取材・文  
—柳原三佳 <http://www.mika-y.com/>

■やなぎはらみか  
バイク雑誌の編集記者を経てフリーに。交通事故を主なテーマに執筆する他、TV出演、講演活動も行う。本誌や『週刊朝日』に連載した交通事故の告発ルポは、自賠責制度の大改正につながり話題を呼んだ。また検視や司法解剖に関する取材も精力的に行い、日本の死因究明のひずみを鋭く指摘している。最新刊『焼かれる前に語れ』(共著)、『交通事故被害者は二度泣かされる』など著書多数。自らも限定解除のナナンライダーである。



# 「スピードではなく、 制動の名人になれ!!」

学校のグラウンドで砂煙を上げての白バイ急制動実験に歓声が!

7月14日、東京都立町田工業高校で、高校2年生を対象とした「交通安全教室」が実施された。講演の目的は、バイク事故による被害や後遺障害の実態を知り、安全に対する意識を高めること。そして、バイクの安全運転技術や、巻き込まれやすい事故の発生メカニズムを知り、事故防止に役立てること。「バイクに乗るな」とただ禁止するのではなく、「安全にバイクに乗るためにはどうすればいいか」を教えることの大切さを、身をもって体感できた1日だった。

事故で重度障害を負った当事者のお父さんでもあります。その立場から、さまざまな交通事故事例や損害賠償の問題、重度障害者の現実について話されました。

はじめに北原さんの息子さんがモデルとなった交通安全教育ビデオの放映。その後、NPOの会員の具体的な事故事例を挙げながら、交通事故の恐ろしさと、後遺障害の苦しみを語りました。

「被害に遭ったのは、栃木県足利市の高校生です。平成19年4月26日午後11時15分頃、A君(当時16歳・高校2年)は進学塾から自転車帰宅する途中、青信号になった横断歩道を渡っていた際に、右方向から赤信号を無視して来た加害者B(当時17歳・高校3年生)運転の250ccスクーターに衝突されました。Bは、夜なのにサンングラスをかけ、スクーターに取り付けたスピーカーから音楽を流していたそうです。被害者に謝罪の言葉はなく、自分が見た信号は黄色信号だとウソの主張をしていました。

被害者のA君は頭部打撲に

より頭蓋骨骨折の重傷を負い、救急病院で開頭手術を受け、5ヶ月経過後の同年9月頃より少しずつ意識が戻り始めましたが、「高次脳機能障害」という障害が残り、今年の5月から、「独立行政法人千葉療養センター」に入院中です。加害者は、家庭裁判所から検察庁へ送られ、宇都宮地方裁判所で刑事裁判になり、平成20年6月5日に業務上過失傷害(刑法第211条)事件として実刑判決が下されました。主文は、禁錮1年2ヶ月以上1年10ヶ月以下」というものでした……

例に挙げられたのは、高校生の運転するバイクと自転車に乗った高校生の事故。被害者も加害者も自分たちと同じ高校生ということで、生徒たちは真剣なまなざしで講演に聞き入っていました。

そして北原さんは、実際の事故の経緯を説明した後、

「交通事故は起こさない、という決心を持つこと。メ



初めて間近で見る白バイに興味津々の高校生たち。未来の白バイ隊員がこころいかに?

を両耳にかけて走っていると、危険な音に気づかないので絶対にやめること」

など、高校生の実生活に即したアドバイスを行いました。

北原さんの話の後は、警視庁の元白バイ隊員による講演。冒頭のバイク用ビデオでも出てきたのですが、とにかくバイクは、スピードを出すことより、制動がうまくできるようになることが大切だと力説されました。

講演が全て終わったら、今度は全員で陽射しの照りつける校庭へ。ここで、実際の白バイによ



立派な視聴覚ホールを使って行われた「交通安全教室」。NPO法人交通事故後遺障害者家族の会の北原氏は、スクリーンに被害者の映像を映しながら交通事故の悲惨さを力説した。

バイクに乗りたくって、乗りたいたくって、もう、禁止されていたって我慢できないという高校生。そして、そんな高校生を子に持つ親御さんたち。お互いに、悩みや心配事は尽きませんよね……。

何を隠そう、私も? 年前は、そんな女子高生でした。「ミスター・バイク」はその頃からの愛読書で、いつもどきどきワクワクしながら、ニューモデルやツーリングのページをめくっていたものでし

た。

でも、あの頃のバイクに対する熱烈な憧れは、今思うと危険と隣り合わせだったような気がします。実際に乗り始めてみて、バイクを満足に操ることがいかに難しく、奥の深い乗り物か、また自制心を持って乗ることがいかに大切か……、高校時代には気づかなかつたいろいろなことを、あとなんて少しずつ学んでいったからです。

だからこそ、どうせ乗るなら、早い時期にバイクに触れ、正しい乗り方を憶えるべきではないでしょうか。ただただ「危険だ」「禁止だ」と言っただけで、規制してみたところで、バイク熱は冷めるものではないし、結局どこかで隠れて乗ったり……、ということにつながりかねないと思うのです。

でも、日本にもとつても素晴らしい取り組みをしている高校があったんですね。実は、「NPO法人 交通事故後遺障害者家族の会」代表の北原浩一氏から、「高校2年生の生徒を相手に、バイクを安全に乗るための講演を依頼されたんですよ」という話を聞き、7月14日、私は東京都立町田工業高校へ行つて、一緒に講義を聞いてきました。

大講堂に集まったのは、高校2年の164名の生徒たち。高2の夏休みはバイクの絡んだ交通事故に遭う確率がとても高くなるため、夏休みの直前にこうした講義を行うと、効果的なのだそうです。

まず、10時25分から交通安全ビデオが上映されました。「道路は、ルールのグラウンド」二輪車の安全運転のために」というタイトルの教育映画で、バイクが巻き込まれやすい事故のパターンが、実車を使って実にリアルに描かれていました。

そして、10時55分からは、北原さんの講演です。北原さんは「長男が自転車乗車中、トラックにはねられるという





圧差だらた、校庭での白バイ隊員による急制動実験。フロントブレーキ、リアブレーキ、エンジンブレーキの3つをバランスよく使えば、こんなに安定して短い距離で止まれるのわー！

に連絡をして警察やレスキュー隊が動き、家族に連絡が入り、その後、友達やその他たぐさんの人が関与してひとつの事故が処理されていくことを再確認していきます。また、事故を処理することにかかるコスト、さらにたぐさんの人に心配や迷惑がかかることを勉強する必要があります。その後は事故防止を目的とし、次のような短いCMの鑑賞です。

●シートベルト無着用時の事故の再現VTR (若い学生4人が車に乗って、1人がシートベルトを着用していなかったために車の中で飛び回り、頭や体が激突しあつて4人全員が死んでしまう)

●飲酒運転事故の再現VTR (小さな男の子が庭でサッカーをしているところに、飲酒運転をした車が突っ込み、男の子が一瞬にして下敷きになり即死。この男の子のサッカー選手への夢は一瞬にして消えてしまう) など、かなり衝撃的な内容でしたが、免許を持つ人にとつては知っておかなければいけない事実であること

RAAP PROGRAM Road Awareness and Accident Prevention Program. Includes a circular logo with the text 'CONCENTRATION & COMMONSENSE' and an image of a person riding a motorcycle. Below the logo, it says '交通安全防止プログラムの授業で生徒全員に配布されたテキスト。表紙からすでに生々しい事故の写真が...'

思いました。日本の高校生は16歳からバイクの免許を取ることができ、18歳から車の免許が取得できます。日本の高校ではこのようなプログラムは実施されていないので、事故に遭ったときの危険性や苦しみはわからないし、加害者として事故を起こしたときも、当然事故の重みがわからないのではないのでしょうか。交通事故の本当の悲惨さを知らない人が多すぎるから、ルールを守らない悪質な事故が減らないんだと思います。免許を取るだけ取って、危険性も何も知らないまま運転をして事故が増えるのはある意味当然のこと。少なくともこのようなプログラムで防げる事故はたくさんあると思います。

る、以下の3パターンの走行実験が行われました。

- ①「フロントブレーキのみ使用」
- ②「フロント・リアブレーキとエンジンブレーキを使用」
- ③「リアブレーキのみ使用」

目の前でそれぞれのブレーキングを観察できる機会はなかなか珍しいと思うのですが、高校生達は白バイが砂煙を上げて急制動するたびに歓声を上げ、ブレーキの使い方の違いで、「バイクの挙動」「停止するまでの距離」などにこれだけの差が出るということに、新鮮な驚きを感じていました。

町田工業高校でのこうした取り組みを見て、これは本当に有意義なことだと思いました。全国各地で、バイクの楽しさを教えつつ、安全に乗る方法をもっと積極的に教えていくべきではないでしょうか。この話題に関連して、私の娘が通っていたオーストラリアの高校での取り組みについて、追加で紹介したいと思います。あちらの高校では、日本の違反者講習より、もっときわどい内容のお勉強を義務付けているようです。

## 遺族等の4団体が鳩山大臣に捜査書類の早期開示を求めて面談

本誌8月号でも、『下川事件』(熊本)を取り上げた国会答弁をお伝えしたが、交通事故の調書早期開示に向けて、被害者団体も活動を活性化させている。7月23日の法務大臣への要望を報じる新聞記事を紹介しよう。

### ■捜査書類を捜査段階で開示を

交通事故遺族らでつくる4団体の代表が23日、鳩山邦夫法相と面談し、実況見分調書などの捜査書類を捜査段階で開示するよう要望した。交通事故の捜査書類は、容疑者が起訴された場合は初公判後に、不起訴の場合は不起訴決定後に一部が開示される。このため、不起訴後に実況見分調書の開示を受けた遺族らが「加害者の一方的な言い分だけで不起訴にされた」と訴えるケースが多い。

この日は、「交通事故被害者遺族の声を届ける会」(川崎市)や「TAV交通死被害者の会」(大阪市)などが「遺族が捜査を検証できるようにするため、早期に実況見分調書を開示してほしい」と訴えた。鳩山法相は「できる限り事実関係をお知らせして、被害者遺族のご意見を少しでも反映するようにしたい。被害者が亡くなって『死人に口なし』とされ、加害者が適当な言い逃れをするようなことがあってはならない」と述べた。

(毎日新聞 7月24日)

海外の高校でもこんな取り組みが！

### 私はオーストラリアの高校で「RAAP PROGRAM」(交通事故防止プログラム)という衝撃授業を受けてきました。

柳原さとこ

私は昨年、南オーストラリアに留学し、高校2年生の1年間をアデレードの公立高校で過ごしました。その中で日本にはない、とってもインパクトのある交通事故の授業を体験したので、そのことをレポートしたいと思います。

それは、「RAAP PROGRAM」(Road Awareness and Accident Prevention Program)と呼ばれるもので、オーストラリアの公立高校を対象に、州政府と警察、消防が主体となって毎年行われている、学生による交通事故を防ぐためのプログラムです。授業は1時間目から4時間目まで、全ての高校2年生が受講の対象となります。

とにかく、衝撃的な内容でした。まず驚いたのは、私たちの目の前で廃車を使い、レスキュー隊の人が車の解体をしたことです。そのとき、実際に交通事故に遭った直後の人の、「ヘルプミー！ ヘルプミー！」という生々しい叫び声の録音テープを再生し、まるで人が中に閉じ込められているかのような臨場感を出すのです。

その後、実際にVTRを見るのですが、本当にグロテスクな内容なので、泣き出した気分が悪くなったりする人もたくさんいました。そうした場合に備えて、いつでも退出可能なように、あらかじめ保護者に退出許可をとってあります。許可されない人はVTRを鑑賞することはできません。

鑑賞後は、事故に遭ってからどれくらいの人があるか事故に関与することになるかを数えたりします。事故後は目撃者または加害者、本人が警察